慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ラテン・アメリカにおける政治運動に関する一考察 (三・完)
Sub Title	On the political parties in Latin America (3)
Author	賀川, 俊彦(Kagawa, Toshihiko)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1962
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.35, No.3 (1962. 3) ,p.14- 37
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19620315-0014

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ラテン・アメリカにおける政治運動に関する一考察（三・完）

賀川俊彦

序論
第一部　制度的政治集団と政党
第一章　教会
第二章　軍隊
第三章　官僚……以上前々号
第二部　政党の構成
第一章　一党独裁制
ドミニカ
ヴェネズエラ
パラグアイ
第二章　支配的非独裁政党制
メキシコ
第三章　二党対立制
コロンビア
ウルグアイ
第四章　小党分立制
チリー
アルゼンチン
ブラジル
ペルー……以上前号
第三部　政党の諸類型とその特徴……以下本号
第一章　伝統的政党
第二章　プラグマティズム政党
第三章　思想的政党
共産主義政党
社会主義政党
民族的社会主義政党
キリスト教社会主義政党
ファシズム政党
ナショナリズム政党
第四章　特殊政党
附章　圧力集団
結論

第三部　政党の諸類型とその特徴

これまで、一党独裁制、支配的非独裁制、二党対立制、ならびに小党分立制と四つの政党制に基づいてラテン・アメリカ諸国における政党政治を分析してきた。この制度的分析をもつてラテン・アメリカ政党政治の縦の断面を知ることができたものとすれば、さらに横の断面に分析のメスを入れなければならない。そこで、つぎにこの地域圏諸国において知られているすべての政党をひとまず機能的に類型化して、それぞれの特徴を挙げることをもつて横の分析としよう。この分析の基準としては種々のものが数えられるが、ラテン・アメリカでは伝統的政党(Partido Tradicional)、プラグマティズム政党(Partido Pragmático)、思想的政党(Partido Ideológico)、その他の特殊政党の四つの基準に基づいて類別することができる。

第一章　伝統的政党

伝統的政党はすべてのラテン・アメリカ諸国の歴史を通じて、多かれ少かれその国を支配した。それはパラグアイを除いて一党独裁制のもとにはないが[1]、競争制諸国における主要政党の多くはこの類型に属する。この伝統的政党が概して保守党対自由党として勢力を二分してきたことは、今日のコロンビアとウルグアイの例にみられるように二党対立制のもとでは明確にあらわれているが、小党分立制の諸国では二つのブロックないしは保守主義対自由主義のフラクションとして二傾向対立主義に醸成されている。

歴史的に伝統的政党は多くの論争点を介在せしめた。それは基本的には保守主義と自由主義の対決であるが、中央集権主義もしくは単一制主義に対するに、地方分権主義もしくは連邦主義、教権主義に対しては反教権主義、あるいは寡頭政治対

民主政治、軍人政治対市民政治などに発展している。だが、ラテン・アメリカでは二党対立にしても二つのフラクションの対立にしても、このような論争点は伝統的政党の特質を論ずるには大した意味をもつものではない。

伝統的政党の勢力を二分する根本的要素は階級的なものである。保守党派は大地主、高位聖職者、高級将官を擁しており、これに対して自由党派は革新的思想をもつ専門職業家群、商人、下級将校からなる。かくして、前者は土地や教会を守るために現状維持（status quo）を主張し、とりわけ秩序の保持に努めるが、これに対して後者はこれら特権階級に反対し自由を求めて対抗してきたのである。

秩序と自由、この二つの言葉はラテン・アメリカでは相対的な意味をもつものとして扱われてきたことに注目しなければならない。「ラテン・アメリカ政治生活の初期においては、権力と支配をめぐつて抗争する二つの団体があつた。一方の旗印は『かりに無秩序であつても自由を！』であり、他方のものは『かりに専制であつても秩序を！』であつた。しかも、時には双方とも血文字で書かれていた。」[2] チリーにおける血腥い抗争の歴史は、秩序か自由かのどちらか一方の選択に限定されざるをえない破局に追いつめられたラテン・アメリカ諸国の典型として理解するに難くない。この地域における伝統的政党は多かれ少かれこのように熾烈な抗争過程を経験してきた。この対立抗争が概して理念的におこなわれたコロンビアとウルグァイには今日でも二党対立制が保たれ、他方、実力的抗争の結果、無秩序あるいは専制から脱するに苦慮した諸国に小党分立制が生じ、さもなければ今日なお独裁専制下にあることは、当然の帰結とは云え再検討さるべき問題をあとに残すものである。

伝統的政党が本質的に階級的性格を帯びるものであり、特権階級が保守党派に、中産階級が自由党派に属したことはすでに指摘したが、ラテン・アメリカでは残された階級、ときには大多数の国民がこうした政党に直接参与することから閉め出されていることも重要視されなくてはならない。概して、過去において政治過程に参与した階級的広がり、ないしは国民の

割合が大であつた諸国は二党制に保たれており、あるいは小党制であつても二党制に類似した二傾向対立主義であつて、分党分派活動は比較的に防がれる傾向にある。

伝統的政党の特質ならびに特徴は、要するにそれが階級抗争の具現であること、しかも相抗争する階級は比較的に国家社会の上層部に限られ、一般の庶民階級、特に大多数の下層階級が除外されていたことの二点に絞ることができよう。だが最後に、こうした伝統的政党の具体的運動過程において、歴史上、ほとんどの年代にわたつて保守党が政権を握つてきた事実を挙げておかなくてはならない。第一次、第二次大戦後のような動乱期には、それでも政権の交替が激しく、自由党派の活躍に目覚しいものがあつた。しかし、いつの時代でも、保守反動の揺れ戻しの方が大きく、また長びくのがこの地域における伝統的政党の特徴である。

今日、ラテン・アメリカに代表的な保守主義政党としては、アルゼンチンの保守党、コロンビア保守党、エクアドル保守党、ウルグアイのブランコ党、ヴェネズェラの独立選挙民衆委員会(3)(Comité Popular Electoral Independiente——通常 COPEI と略称する)などを挙げることができる。他方、代表的な自由主義政党にはアルゼンチン急進党、コロンビア自由党、エクアドル急進自由党、およびウルグアイのコロラドスなどがある。

(1) パラグアイの場合、実際政治の運営状況からしてコロラド党による一党独裁であるとすれば、当然、ここでは除外されなければならない。

(2) René León Echaíz, Evolución história de los partidos políticos chilenos, Santiago, 1939, pp. 26-7. Quoted in William W. Pierson and Federico G. Gil, Governments of Latin America, op. cit., p. 317.

(3) 独立選挙民衆委員会はラファエル・カルデーラ(Rafael Caldera)によつて設立されたもので、カトリック教会を支持し、政府の社会主義政策に批判的である。設立後まだいくばくもないが、コロンビア国境沿いのアンデス地域諸国における伝統的保守党を引き継いで再編成されたものである。

第二章　プラグマティズム政党

プラグマティズム(Pragmatico＝実用主義)政党はこの地域にかなり広汎な広がりをもつて絶えず現れたり消滅したりしている。この類型に属する政党が勢力的に相違するのはその性格からして当然であるが、歴史的にはかなり古くから現れており、むしろラテン・アメリカに伝統的な傾向すら見られることは注目されねばならない。

ここに云うプラグマティズム政党とは、思想ないし哲学的な内容よりも、むしろ当面する選挙を勝ちとるという実践的効果を重視する政党を指す。極端な場合には、目的のためには手段を選ばぬことも起りうるし、したがつてこの類型に属する政党はかなり行動的であり、急進的ないし過激的である。こうした政党は、その構成員の積極的行動面を重視するがために、構成員としても各自の思想、哲学、宗教その他過去の傷あとに関係なく党と接触しうるのである。

プラグマティズム政党は、実用主義に基づく程度に応じておよそ三つに分類することができる。

まず、広義における実用主義に基づいた場合、その政党は政治的発言力を集団的に訴えようとする。この範疇に入るものとして、今日のラテン・アメリカにおける好例はアルゼンチン左派急進党(Unión Cívica Radical del Intransigente)とチリー急進党(Partido Radical)である。アルゼンチンの左派急進党は、ペロン失脚後の一九五八年選挙において、圧倒的な大衆急進党に勝つためには、かつての敵ペロニスタスの支持を求めるほかなかつた。そのため、左派急進党は労働総同盟をはじめとしたペロニスタス労農勢力、知識階層、専門職業家群、商工業者、学生連盟などを結集して民主主義統一戦線を設立することに成功し、目的を達成したのである。[1] これと同様のことはチリーでも行われており、この国の急進党は人民戦線(Frente Popular)あるいは人民行動戦線(Frente de Acción Popular)のもとに学生、労働組合、中小商工業者らの統一に努め、ある程度の成功を収めている。[2]

つぎに、狭義における実用主義に基づく場合の典型的類例として、ラテン・アメリカ政治生活の積年の要素であるペルソナリスモ（Personalismo＝個人的信頼主義）を挙げねばならない。ペルソナリスモ、これはカウディーリスモ（caudillismo＝統領主義）と同義語なるものとして捉えられるが、ラテン・アメリカの政治生活においては、前者は後者に比してより本質的な内容をもつものとして解されねばならない。

ペルソナリスモとは非人格的な政治理念とか綱領とかの思想的基盤よりも、むしろ個人的、家族的な人間関係を通じて、パーソナリティに信頼の基盤をおく傾向であると解することができる。このことはラテン・アメリカにおける歴史的政治的属性として多くの学者に指摘されている。たとえば「個人的人格的指導性におかれた大きな価値は……政党ないしは政綱よりもむしろ人間に投票する傾向を強めた。」[3] また、「昔からラテン・アメリカ人は……公共政策よりもむしろ公的人物に常に関心を抱いてきた。かれらは議論はさておき、多彩な顔ぶれの指導者に追従する傾向がある。……派手やかな民衆煽動者には、じつさい、大勢の支持者が約束されるのである」[4] とも云われている。

じつさい、このペルソナリスモないしは「カウディーリョ・コンプレックス（caudillo Complex）」から解放されている政党は、まずラテン・アメリカにはないものと云わなくてはならない。伝統的政党においてさえ、こうした属性に基づいた内部的派閥抗争はつねに党の性格を変え、ときには同体異質的[5]な、あるいは逆に同質異体的な政党を生む結果になる。

魅力的性格をもつた指導者個人の政治的野心を助けるために組織された「誰か主義」政党は、現代ラテン・アメリカにあつてもいたるところに存在している。メキシコのカリスタス（Callistas）、ウルグアイのバトリスタス（Batllistas）、アルゼンチンのイリゴーエニスタス（Iligoyenistas）、パラグアイのフランキスタス（Franquistas）、ブラジルのケレミスタス（Queremistas）、エクアドルのヴェラスキスタス（Velasquistas）など[6]例を挙げれば際限がない。これらのうち特筆すべきは、ウルグアイの一九世紀における経世家バトル（José Battle y Ordoñez）によつて創設されたコロラド党のバトリスタ派であつて、これ

は今日でも党主流として偉大な指導者の理念が守られており、ラテン・アメリカではもつとも歴史あるペルソナリスモ政党として異彩を放つている。

しかし、ペルソナリスモ政党は、概してそのカウディーリョあるいは中心人物の死によつて早晩解散するか、もしくは他に吸収される傾向にあり、永続性に乏しい。最近のラテン・アメリカには、こうした政党が数的に勢力的に衰微しつつあることを示す徴候がいくつか見受けられる。

実用主義政党の類型に属する最後のものにアド・ホック（ad hoc）政党がある。これは目前の政治目的のために組織されるその場限りの即席（インスタント）政党であつて、この目的が達成されたり、あるいは失敗した場合には直ちに消滅する。

甚だしき一例を挙げると、「こうした時機には政党を創作することほど簡単なものはない。政党を作るにはたつた三人の人間と一つの道具がありさえすれば充分である。総裁が一人、副総裁が一人、それに秘書とゴム判が一個あればよい。政党は副総裁と秘書はいなくともやつていける。……時にはたつた一つのゴム判さえあれば充分な場合もあつた。」[7] これはボリヴィア、エクアドル、パラグァイにおける一時代を指して述べられている。じつさいには、これほど極端な場合は少いと思われるのであるが、革命のさなかや無秩序のどん底にある時期には特に重視される必要がある。

（1）第二部第四章《アルゼンチン》本誌前号六七―九頁参照。
（2）第二部第四章《チリー》本誌前号六四―七頁参照。
（3）William W. Pierson and Federico G. Gil, Governments of Latin America, op. cit., p. 31.
（4）Austin F. Macdonald, Latin American Politics and Government, op. cit., p. 2.
（5）政党の同体異質的現象は、パラグァイにおけるコロラド党の内紛にみられる。第二部第一章《パラグァイ》本誌前号四六―五〇頁参照。
（6）これらの政党名はそれぞれ次に挙げる指導者に由来する。メキシコのカリスタスから順に Plutarco Calles, José Batlle y Ordoñez, Hipólito Irigoyen, Rafael Franco, Getulio Vargas――この場合は "Queremos Vargas!" (We Want Vargas!) ヴァルガスを「われわれは求める」に由来する――, José María Velasco Ibarra

(7) Luis Terán Gomez, Los Partidos políticos y su acción democrática, La Paz, 1942, pp. 50-1. Quoted in George I. Blanksten, Ecuador, op. cit., p. 70.

第三章　思想的政党

第三の類型としての思想的政党はラテン・アメリカにおける近代的政党の花形として脚光を浴びている。ただし、今日のラテン・アメリカでは、国家形態に関する思想的対立はもはや古典的な部類に属しており、むしろ階級的対立から発する思想、すなわち社会主義、共産主義に論争点が移っている。したがって、ここでは階級性に基づく思想的政党だけを扱うことにしたい。

共産主義政党

まず共産主義であるが、これを非合法化している国はラテン・アメリカにいくつか見受けられる。だが、思想としての共産主義はアメリカ大陸全土に広がっており、かりに政党活動が禁止されている国であっても、共産分子による地下活動はさかんにおこなわれているものと見なくてはならない。

共産主義者による政党活動は一九二〇年代の初期に早くもアルゼンチン、チリー、およびペルーにみられる。ラテン・アメリカに産業革命と社会革命の連合した波がどっと押し寄せてきたのはこの時代であった。共産主義勢力はこうした革命運動の波に便乗し、「反帝国主義」、「経済的諸条件の改善」、ならびに「階級的差別の撤廃」などのスローガンを掲げて工場労務者、鉱夫、港湾労務者らの間に肥沃な地盤を見出し、各地の労働組合に浸透したのである。(1)

一九三〇年代の不況期は共産主義勢力が活動するに絶好の場を提供するものであった。かれらはこの年代に早くも最盛期

を迎えることになる。ブラジルでは、一九三五年に社会主義者、労働組合、それに自由主義者らが国民自由同盟（Aliança Nacional Libertadora）のもとに結合して、時のヴァルガス政権に一大脅威を与えたのであるが、この同盟の活動の原動力となつたのは共産党であつた。やがて国民自由同盟は政府の弾圧を受けて解散させられ、同時にブラジル共産党もまた非合法化されて、第二次大戦中に復活が認められるまで地下潜入を余儀なくされたのであるが、この間といえどもその隠然たる勢力は独裁政権にとつて絶えず脅威の的となつていたのである。

共産党が他の革新勢力と政党連合に結合する戦術は、ブラジルを皮切りにラテン・アメリカの各地において採用されている。一九三〇年代後期には、チリーに共産党から中間派までを含む左翼諸政党連合の人民戦線（Frente Popular）が結成され、アギーレ・セルダを擁して保守党を破り、ラテン・アメリカではじめて人民戦線が政権を掌握した。[2] コロンビアでも、一九三〇年に結成された共産党が、左翼諸政党とともに時の自由党政権の後楯となつて革新的影響を与えていた。メキシコには強力な共産党はかつて存在したことはないが、メキシコ労働者同盟（Confederación de Trabajadores de México）の指導者であるロンバルド・トレダーノ（Vicente Lombardo Toredano）は一八三八年にラテン・アメリカ労働者同盟（Confederación de Trabajadores de América Latina）を組織し、メキシコをしてラテン・アメリカにおける労働運動の牙城たらしめようとした。ロンバルド・トレダーノはこの地域における親ソ派最大級の人物として知られているだけに、メキシコにおける共産主義の影響力のほどを推察することができよう。

一九四〇年代、それも第二次大戦中を通じて共産党は膨脹し続けたのであるが、一九四五年、大戦の終結後に澎湃として湧き起つた民主化の嵐は、ラテン・アメリカ諸国政府の弾圧によつてかえつて共産党の合法的活動を封ずる結果となつた。戦時中に復活を認められたブラジル共産党は一九四七年に再び非合法化され、ブラジルはソヴェトと外交関係までも断つにいたつた。チリーでも共産党は石炭ストライキを煽動したかどで一九四八年に非合法化され、コロンビアでは同年のボゴダ

叛乱の罪を追求されて弾圧を受け、同時にソヴェトとの外交関係も断絶された。

こうして一九五〇年代には、メキシコ、コロンビア、エクアドル、アルゼンチン、ウルグァイの五ヵ国を除いて、ラテン・アメリカにおける共産党はすべて非合法の烙印を押され、ここに合法的活動としての共産党の最盛期はいちおうのけじめをつけることになつた。とは云え、その後グァテマラの政権が共産党の牛耳るところとなつたことは話題を提供している。それは遠大な労働・農業改革の遂行に全力を挙げていたアルベンス（Jacobo Arbenz Guzmár）政権（一九五一―四年）を共産党が支持し、その代償としてこの国の労働・農業組合における主体的勢力となることが認められたことである。政府の基本的政策と合致して、しかも労農勢力の基盤を我がものにした共産党は、国の死活権を握つたも同然であつた。[3] こうしてグァテマラの政権は一九五四年三月の第一〇回米州国際会議における反共産主義決議案の非難を受け、同年六月、軍事クーデターによつて倒れるまで準共産党政権の色合いを保つたのである。

今日、ラテン・アメリカにおける共産党勢力で最大のものと目されているのはアルゼンチンの労働党（Partido Concentración Obrera）であり、党員数は約七万と云われている。ボリヴィアはかねてから極左革命党（Partido Izquierdista Revolucionario）として知られており、メキシコは人民党（Partido Popular）として、その他ブラジル、チリー、キューバ、グァテマラなどに重要な共産党が存在している。

最近のラテン・アメリカにおける共産主義勢力は、政治活動としては確かに衰微しているように見える。これは、しばしば諸国政府によつてなされた弾圧に直接起因するものと考えられるが、そのためか、今日では共産党の名を冠するものはほとんどなく、「人民党」とか「革命党」の名のもとに辛うじて体裁を保つている程度である。だが、かれらがコミンテルンの指令に従つていることは事実であり、[4] 今日では労働者・農民などの下部組織に共産主義を浸透させ、「下から」の突き上げを狙う戦術に転換したものであると考えられるのである。いずれにせよ、ラテン・アメリカに共産党が非合法化されてい

る国の多いことは、それだけ諸国政府が共産党の潜在勢力を認め、脅威を受けていることの徴候にほかならない。

社会主義政党

社会主義政党はじつさいにラテン・アメリカ全地域にわたつて存在している。社会主義の歴史は古く、一八三七年すでにアルゼンチンにユートピア社会主義が導入され、その後ヨーロッパからの避難民によつて発展されている。[5] 社会党 (Partido Socialista) としての展開は一八九六年にはじまり、一九二〇年代にはあらゆる労働運動の支配勢力として最盛期にあつたが、その後、ペロニスタ党にその指導権が奪われ、今日ではそれは急進党 (Unión Cívica Radical) の掌握するところとなつて社会党は辛うじて昔日の形骸をとどめているにすぎない。

チリーの社会党 (Partido Socialista) と民主党 (Partido Democrático)、それに労働社会党 (Partido Socialista Obrero) はいずれも社会主義に思想的基盤をおくものであるが、労働組合運動では無政府主義者と対立しており、思想的には同系に属しながらも敵対感情が激しく、互いに孤立している。これは、アルゼンチンと同じく、この地に固有の民族的社会主義を育てた土着の急進党 (Partido Radical) が国民感情に深く喰い込んでいるがためにほかならない。ペルーでも、社会党は第一次大戦後に生れたが、アプリスモ運動に地盤を喰われて、今日では北部の石油産出地に多少の勢力圏を残しているにすぎない。その他、エクアドル、コロンビア、ウルグアイ、キューバ、ブラジルなどにも社会主義政党は存在しているが、いずれも低迷した現状にある。

このように、ラテン・アメリカにおける社会主義政党は、これまで単独で政権を握つたことがないばかりか、その勢力はほとんどの国で減退の傾向にある。その理由としては種々取沙汰されているのであるが、もつとも重視されなくてはならないことは、前述したように、この地に固有の民族的社会主義——アルゼンチン、チリーの急進主義、ペルー、キューバ、ヴ

エネズエラのアプラ主義――が土着のものとして国民感情に訴えるところ大であり、これが共産主義はもちろん社会主義の地盤を切り崩し、自己陣営への導入にかなりの成功を収めている事実である。

ついで、社会主義政党が第一次大戦後に国際共産党の指導に身を委ねた事実に注目しなくてはならない。一般に、社会主義政党はマルクス主義に強い関心を抱く知識階級人に指導されてきたのであるが、かれらは明らかに労働者階級に深い関心を寄せているにもかかわらず、その割には大衆間に真の勢力を持ちえない。この実践的運動過程における矛盾が、かれらをしてコミンテルンの走狗たらしめた根本原因と考えられる。じつさい、「社会主義者は次第に純理論的、学究的、知識的なものになつてきた[6]」ことはまだしも、「理論的ないし哲学への熱中と、いわゆる実際的にして健全な常識の欠如する傾向にある[7]」ことが社会党を今日の衰頽に招いたとしても過言ではない。

民族的社会主義政党

ここで、純粋な社会主義政党ではないが、ラテン・アメリカに固有の社会革命的性格に即応しうる精神的要素の完成を目的とした、いわゆる民族的社会主義政党を挙げておきたい。

まず、この地域において実質的に最大の民族的社会主義政党と目しうるのは、メキシコの立憲革命党(Partido Revolucionario Institutional)であろう。国民革命党(Partido Nacional Revolucionario)として一九二九年に最初の党大会を開いたこの政党は、メキシコにおけるすべての革命勢力を結集した地域的結合体として生れたが、一九三九年には労働者、農民、一般民衆、それに軍部ら四つの独立部門を設置して国民行政委員会の下におくなど、政党機構を機能的なものに改革し、名称もメキシコ革命党(Partido Revolucionario Mexiceano)と改称された。その後、社会民主主義ともいえる革命段階が着々と推進されるにいたり、軍部門の廃止を含む党の再編成がおこなわれ、一九四七年から今日の立憲革命党となつた。党創立以来二度の

再編成は党勢力をますます拡大し、かつ緊密化しており、今日では四百万以上の党員を含む[8]ものとみられている。軍隊ぐるみ、政府諸官庁ぐるみを党員とした巨大な立憲革命党に対して、反対諸政党は非民主的であると攻撃するが、メキシコでは議会制度は守られ、いかなる政党も法律上は立憲革命党と同列に扱われている。これに対抗しうる政党がメキシコに育たないのは、けだし、性格的に幅の広い立憲革命党がこの地に固有のものとして国民感情の共感をかちとつているからであろう。

ペルーのアプリスタ党（Alianza Popular Revolucionaria Americana）も民族的社会主義政党として重要である。このアプラ主義運動はアルゼンチンのコルドバを精神的革命の母とし、メキシコの農地革命を父として生れたと云われている。アプリスタ運動の主体的勢力は農民集団であるが、最近のペルーには産業化が推進されるにつれて工場労働者などの参加が目立つているようである。今日、政党としての原型はペルーにあり、その他ヴェネズェラの民主行動党（Partido Acción Democrática）、コスタ・リカの国民解放党（Partido Liberación Nacional）、キューバのアウテンティコ党（Partido Autentico）、それにある意味においてはメキシコの立憲革命党もここに含まれるものとして挙げられよう。アプリスタ運動は実践的な面で二つの特異な性格をもつものであるが、その一つは急進的農地改革とか下層階級の政治過程への統合といつた、およそこれまでに手を差し伸べられたことのない階層に社会的経済的変革を求めていることである。第二に、この運動の国際的関連はまつたくラテン・アメリカ地域に限られていることで、じつさいこの地に固有のものと云われる点である。地域内の、しかも数少い国際的関連しかもたぬアプリスタ運動であるが、どの政党よりもずつと下層階級に支持者を見出すアプリスタ運動が、今後のラテン・アメリカにおける社会革命にどう展開していくか、甚だ興味あることと云わざるをえない。

キリスト教社会主義政党

民族的社会主義政党の一つでもあるが、キリスト教社会主義に基づくチリーの国民ファランヘ党[9]（Partido Falange Nacio-

nal) を挙げておきたい。これはローマ法王の回勅 (Rerum Novarum および Quadragesimo Anno) に基づいたカトリック教社会主義を信奉するもので、知識階級と労働者間に支持層を求め、これまでの権威的地位を保ち続けようとする、いわゆる教会型に対し、「下から」の思想的突き上げを狙う宗派型の具体的運動としての意義をもつものである。[10] 労働者階級の社会的経済的改善を目的に、カトリック教会を中心として盛り上げられたこの運動は、ラテン・アメリカにおける精神的革命の機運に触れて充分に発展する要素をもつものと考えられる。この種のカトリック教社会主義政党は歴史的に浅く、せいぜい一九四〇年代に具体的展開がなされたにすぎない。しかし、チリーの国民ファランヘ党の他にも、同系の政党はウルグァイのキリスト教民主党 (Partido Democrático Cristiano)、アルゼンチンのキリスト教民主党 (Partido Democrática Cristiano)、ボリヴィアの社会民主党 (Partido Social Democrático) といくつか数えられ、国際的にもかなり豊かな連繋を保つている。

ファシズム政党

ファシズムは一九三〇年代にラテン・アメリカに栄えた。今日ではもはや時代遅れの感覚を免れないが、当時の残党はいまだにアルゼンチン、ボリヴィアに温存されているので言及しておきたい。この地におけるファシズム政党がヨーロッパのドイツ・ナチズムやイタリアのファシズムに型どられたことは附け加えるまでもないが、概して、ラテン・アメリカではこれらの原型にこの地に固有の要素が折り込まれていることに注目しなければならない。反対勢力に対する弾圧政策にしても、ファシズムの理論そのものにも、いくつかの相違点を見出すことができる。ラテン・アメリカの軍事政権は軍部ならびに支配階級の特権を強調はしても、これは伝統的独裁体制の属性としての権威主義にほかならず、一般人の私生活、特に経済的文化的生活には、ヨーロッパのファシズムにみられるがごとき全体主義的抑制は課せられなかつた。また、ラテン・アメリカのファシズムには大衆の支持がなく、資本主義の未成熟なところでは経済的基盤もなかつた。

結局、ラテン・アメリカにおけるファシズムは、この地に伝統的な権威主義的独裁の成立を支え、さらに権力の集中を図るために利用されたにすぎない。このことはブラジルのヴァルガス政権下におけるインテグラリスタ党（Integralistas）が何よりもよく実証するものである。チリーのナチス党（Nacistas）とファランヘ党（Falange de Portales）、ボリヴィアの国民革命運動（Movimiento Nacionalista Revolucionario＝MNR）、メキシコのシナルキスト党（Sinarquistas）[11]、アルゼンチンの愛国者連盟（Liga Patriotica Argentina）、アルゼンチン在郷軍人会（Legión Cívica Argentina）、ペロニスタ党（Peronistas）などは同傾向のファシストあるいは準ファシスト政党としてこの範疇に入る。

ナショナリズム政党

ラテン・アメリカにおける政党のほとんどは、かなり狭い活動分野に基づいており、社会の小分派に集中的アッピールを寄せる。したがつて、この地域のある一国に、二つないしそれ以上のナショナリズム小政党が、互いに対抗的関係にあるのを見出すことは稀でない。また、「人種の坩堝」と云われるラテン・アメリカでは、民族意識は極めて薄いものとみなければならず、したがつて「産業の国有化」とか「外国資本の除去」を主張する政党にしても、はたしてどの程度の国民意識に根ざしているのか甚だ疑問視せざるをえない。ナショナリズムの歴史には古いものがあるのだが、具体的運動としてはせいぜいクリオーリョ・ナショナリズムの域を出るものではなく、それはまた社会主義や共産主義などの社会運動、あるいは教会思想に基づく運動に巻き込まれているものと考えられる。

典型的なナショナリズム運動は農地改革やインディアン社会の擁護を主張するペルーのアプリスタ党に見られる。さきに挙げたことだが、ヴェネズエラの民主行動党やコスタ・リカの社会民主党もこの部類に属する。反教権的ナショナリズムは知られていないわけではない。――たとえば、「われわれはエクアドル人であつてローマ人ではない！」[12]というスローガン

は効果的なところを示している。――だが、ナショナリズム政党がむしろ積極的に教会を抱き込み、教会の世俗化に反対して宗教的偏狭をすらのぞかせ、母国における外国勢力を根絶しようと努めることもある。しかし、このような政党はいずれにせよ弱体であり、アルゼンチン、ボリヴィア、パラグァイ、ヴェネズェラなどに辛うじて存在しているにすぎない。

思想的政党に関して、これまで共産主義政党、社会主義政党、ファシズム政党、それにナショナリズム政党と大きく分けて四つの思想的基盤からラテン・アメリカにおける諸政党を分析してきた。だいたい、思想的政党の活躍が顕著であるのは、小党分立制の諸国に多いことが一見して明らかだが、しかし、ここに重要な特徴が二つある。その一つは、競合制のもとにある諸国のどこでも、思想的に同系統と見られる独立政党を二つないしはそれ以上に存在することを許していることである。かりに、それぞれが外形的に一本石化しているとしても、内部的抗争や分裂には通常われわれが想像する以上に激しいものがあるようである。

いま一つの特徴は、いくつかの小政党が連合して「国民戦線」とか「人民戦線」を作る場合、思想的には相容れぬものがあつても容易に結びつき、あるいは思想的には当然結合が予想される政党同志が互いに対抗する戦線に分れることがしばしば行われているという事実である。こうした二つの傾向は何を示すものであろうか。ここでなまじの推論を下すことは危険であるが、ラテン・アメリカにおける諸政党は、それが冠るところの思想的名称のもとに一元的に結合化されたものでないことは明らかであろう。

(1) 拙論「ラテン・アメリカにおけるナショナリズムの展開」前掲、三五〇―一頁。

(2) 第二部第四章《チリー》本誌前号六四―七頁参照。

(3) Amy Elizabeth Jensen, Guatemala: A Historical Survey, New York, 1955, pp. 168-79.

(4) Robert J. Alexander, Communism in Latin America, op. cit., pp. 18-24. アレキサンダーはコミンテルンとラテン・アメリカにおける共産党との関係を歴史的に七期に分けて論じているが、これら共産党がコミンテルンの指令に従つて活動したことの事実は、第二次大戦中にナチ

ス・ドイツがソ連に開戦を挑んだ時を転機として、それまでの反米・親枢軸から親米・反枢軸に態度を豹変させたことにもつともよく現れている。

(5) William W. Pierson and Federico G. Gil, Governments of Latin America, op. cit., p. 332.

(6) Russel H. Fitzgibbon, "The Party Potpourri in Latin America", The Western Political Quarterly, Vol. X, March 1957, p. 13.

(7) Ray Josepha. Argentine Diary. New York, 1944, p. xxxiii.

(8) William W. Pierson and Federico G. Gil, Governments of Latin America, op. cit., p. 335.

(9) スペインのフランコ政権下に組織されたファランヘ党の流れを汲むチリー・ファランヘ党、あるいはまたファッショ的なファランヘ党と紛らわしいものがあるが、国民ファランヘ党はこれらと何の関係もない。厳に区別される必要がある。

(10) 第一部第一章　教会、本誌前々号五六—九頁参照。

(11) シナルキスモ運動とは「階級間の協力」を意味し、デカダントな自由放縦主義や無神論的な共産主義を排して、キリスト教による支配体系を築くことを目的とした運動であつて、メキシコの「革命的」農地改革に失望した農民層に支持されている。これと同様なる組織は、エクアドルのカトリック労働者国民同盟（Confederación Nacional de Trabajadores Católicos）とエクアドル・カトリック労働者同盟（Confederación Ecuatoriana de Obreros Católicos）、コロンビア労働者連合（Unión de Trabajadores Colombianos）、コスタリカの「新事態」労働者同盟（Confederación de Trabajadores "Rerum Novarum"）などである。

(12) George I. Blanksten, "Political Groups in Latin America", The American Political Science Review, Vol. LIII, March 1959, p. 114.

第四章　特殊政党

ラテン・アメリカにおける政党は、上述したごとく、伝統的政党、実用主義的政党、思想的政党など三つの類型をもつてだいたい網羅することができる。だが、ここに異教徒的ないしは地域的分離主義的傾向をもつ集団について、少しく触れておかなくてはならない。これは政治目的に分離主義的項目を含むというだけで、特に実用主義的政党と類別する必要もないかとも考えられるのであるが、かつてのスペインの八植民地が今日の二〇ヵ国に分離した事実には、いずれにせよ大なる意義が見出されるのである。

今日のヴェネズエラ、エクアドルは大コロンビアから分離独立し、また中米連邦（Central American Confederation）から五共和国が生れるなど、こうしたところにラテン・アメリカの大きな分離主義的傾向と、これを指導した人物ならびに支持勢力の積極的活動とを見逃すわけにはいかない。現代に関するかぎり、このような特殊政党は存在しないが、ブラジルにはサンパウロとミナス・ジェライス両州が分離主義に近い政治的合作をはじめるかもしれぬ顕著な徴候がある。このような割拠主義はペルー、エクアドル、ボリヴィアなどにおける政党に見受けられるのであるが、地域的に基づく政党が将来において分離主義を強力に推進するかもしれぬことはまつたく理由なしとすることはできない。

附章　圧力集団

圧力集団は政党と厳に区別して考えられねばならない。このことはヨーロッパ諸国や米国における政党論ないし比較政治研究の範を垂るるところである。およそ、欧米諸国の政党とは、議員候補者や政策の選択、あるいは選挙運動を通じて最大の利益集団連合を作ろうとする。これに対して、圧力集団はこのような公的活動によることなく、諸種の呼びかけやとり引きなどの圧力を議員の選択や政策作成の諸過程に加え、影響を与えることによつて政治的要求を権威的裏付けのある政策に転化させたり、招来せしめようとする。

ラテン・アメリカ諸国における政治集団の間にも、欧米に倣つて政党と圧力集団との区分線を引けないことはない。だが、ラテン・アメリカ、特に政治的経済的に後進性をもつ諸国では、政党そのものがすでに欧米の政党に比して思想的厳密性を欠きがちであり、かつ非集合的な性格をもつものであることはこれまで論述したところでもある。圧力集団としての意義とか実際的運動の重要性には充分尊重しなければならないものがあるにもかかわらず、ラテン・アメリカに欧米のそれと同一の区分線を引くことには甚だしい困難を伴うものがある。したがつて、本来ならば任意的結合集団における政党と圧力

集団とは厳に区別されなければならないのであるが、資料不足の関係もあるので政党の項目に附随して簡単に圧力集団の諸類型を挙げるにとどめ、改めて再検討する時をもちたい。

ラテン・アメリカの圧力集団として伝統的にもつとも強力な影響力を有すると思われるのは大地主の連盟であろう。ラテン・アメリカ経済における土地の重要な役割と支配的な半封建的土地保有制とを考えるならば、こうした集団がどれほど政治的に重要な存在であるかを理解することは難しくない。アルゼンチンのホッキー・クラブ（Argentine Jocky Club）はこの地における地主連盟としてはもつとも有名なものとされているが[1]、これと同様な団体は他の諸国にも存在し、保守的反動的影響力の発源となつていることは間違いない。

つぎに、ラテン・アメリカ諸国の産業開発化に伴なつて、最近ますます圧力集団としての重要性を増大せしめているのが労働組合である。政治集団としての機能的見地からして、この地域で大きな労働組合は、アルゼンチンの労働総同盟（Confederación General del Trabajo＝CGT）、チリー労働者同盟（Confederación de Trabajadores Chilenos＝CTCH）、キューバ労働同盟（Confederación del Trabajo Cubano＝CTC）、メキシコ労働者同盟（Confederación de Trabajadores Mexicano＝CTM）などである。これら組織労働団体は、ラテン・アメリカでは概して事実上の政治的結合体であつて、社会主義諸政党はこうした団体に依拠している。また、共産党が非合法化されている諸国では、これら労働組合は共産党員にとつて潜入するに絶好の場となつている。

また、学生連盟が猛烈に積極的政治活動をすることもラテン・アメリカの特徴である。大学は「国家政治の闘争の縮図である。学生はまつたくとるに足らぬ挑撥に乗つてストライキ、暴動などの政治的デモンストレーションを起す」[2]とはアルゼンチンにおいて云われた言葉だが、他の諸国でも学生連盟は立派に圧力団体としての資格を備えている。ペルーのアプリスタ党を設立したアヤ・デ・ラ・トーレがペルー学生連盟会長であつたことは前に述べたが、キューバのカストロ（Fidel

Castro）首相が学生連盟の一指導者としてドミニカの独裁者トルヒーリョ打倒の遠征隊に参加したり、過激な政治活動のためにいく度となく逮捕された[3]ことも、この地における学生運動の政治的反応の鋭さをあらわしているものと云えよう。

専門職能団体も多角的産業化の影響を受けてますます重要性を帯びてきたようにみえる。もつとも古参で強力なのは弁護士協会である。実業家グループや技術者団体はまだ小規模ではあるが、これも各国の工業化と経済発展が続くにつれて顕著な成長を示すことが期待されよう。

在郷軍人会は政治的にさほどの重要性を意味しないが、ボリヴィアとパラグァイ間のチャコ戦争（一九二八―三五年）を境として、これら両国の在郷軍人会は数的にも質的にも強力な圧力集団となつた。ボリヴィアではこうしたグループが国民革命運動（M・N・R）の中核体となつていると云われているが、圧力集団としての政治活動は、概して政府の対外政策とか軍事問題に関して敏感な程度とみられる。ラテン・アメリカにはチャコ戦争以来、軍隊の拡張を必要とするほどの国際戦争はない。したがつて、圧力団体としての在郷軍人会の将来の地位は下ることはあつても上ることはまず考えられない。

（1）George I. Blanksten, "Political Groups in Latin America", op. cit., p. 115.
（2）Ysabel F. Rennie, The Argentine Republic, New York, 1945, p. 212.
（3）Leo Huberman and Paul M. Sweezy, Cuba: Anatomy of a Revolution, New York, 1960, pp. 26-7.

結　論

これまで、ラテン・アメリカにおいて政治的に指向する諸集団を網羅し、体系化に努めるとともに個々の検討を進めてきたわけであるが、ここに帰結としていま一度、綜合的にこれら諸集団の現代的意義を再検討しておきたい。

教会、軍部、あるいは官僚などの制度的集団が、ラテン・アメリカではつい最近まで、ある国では今日でもなお政治的に

特異な権威的地位を保つてきたし、保つていることは第一部に述べた。これら制度的政治集団はいずれも植民地時代の遺産であり、未成熟な政党政治に代つてラテン・アメリカを支配したものである。不幸にして、政党政治の育成さるべき基盤を持たなかつたスペイン系ラテン・アメリカが独立後直ちに連邦制あるいは共和制に切り換えられたことは、これら制度的諸集団の政治的干渉を容易ならしめ、その結果は革命と独裁あるいは無秩序と専制の悪循環を蔓延せしめることとなつた。これに対して、ポルトガル系のブラジルがその独立後半世紀の間、帝制を採用して議会政治の運営を推進したことは、その後、連邦共和制に転じてからも概して制度的諸集団の干渉を受けることなく、比較的平穏な政党政治に終始しえたのである。これら両者を比較した場合、またさらにスペイン系諸国中においても、政治の運営が概して健全な政党政治に任されてきたコロンビア、エクアドルの例をみるとき、制度的集団による政治的干渉の有無は一国の政治的生命をゆさぶる重大事であつたことに思いいたるのである。

教会のもつ宗教的権威、軍隊や官僚のもつ社会的権威、これらの権威が権力的相対関係の集約的表現である政治権力関係においてもつとも強くその権力を発揮したことは、ラテン・アメリカに好例の数々がみられるところである。教会は世俗的秩序を自己のもとに組織しようとして権威的政治機能を営んだ。軍隊という閉鎖的特権集団は、社会的昇進の途を封じられていたラテン・アメリカにおいては栄誉と権力の階梯を登りうる唯一の装置であつたが、その軍事的行動力を利用して軍部と国家の直結を図つた。官僚は教会や軍隊に比するならばその権威的機能面において数段劣るものであるが、現代政治の必然的所産として、また大規模な社会政策や国家企業をおこなう国家権力の機能の連続性と固定性とを利用しつつ、膨大な官僚制を醸成するにいたつたのである。

しかしながら、政党政治が漸く軌道に乗り出した頃から、制度的諸集団は多かれ少かれそれぞれの権威的体制に質的変化を見せはじめた。一八九〇年の法王回勅「新しい諸事態（Rerum Navarum）……」に基づくいわゆる宗派型のカトリック教

会勢力は、キリスト教社会主義の名のもとに政党を組織し、政治的平等と経済的保障への時の動きに応じて、ほとんどラテン・アメリカ全域にわたる国民大衆運動を開始した。軍隊は今世紀に入つてから、一九三〇、四〇年代における反動期を除くならば、概してプロフェショナリズムの方向に動いており、今日では一部諸国の例外を別とすれば、それは文官大統領の統帥下におかれた国家の安定勢力として、国民大衆から愛される軍隊となるべく指向している。教会と軍隊の質的変化に比して、官僚はその規模こそ膨脹する一方であるが、行政能率と民主的統制との結合が要求される今日にあつて、これは質的にもつとも時代遅れの因襲的存在であると云わなくてはならない。このことは独裁体制下——個人独裁ないしは一党独裁を問わず——における官僚の場合、特に明確にあらわれている。

要するに、かつて権威的支配的地位を誇つたこれら制度的諸集団は、近代的政治運動の活潑化してきた今日では、漸くその政治的地歩を政党に譲つたとの感が深い。教会と軍部はすでに自発的に自らの体質改善に乗り出している。ただ、官僚はその巨大な規模のわりに質的な劣悪さが目立つており、合理的な官僚制、すなわち科学的人事行政もしくは能率的公務員制への改革が強く望まれている。これが改革にさいしてはまずもつて従来のような官僚と政党との狎れ合い的交流を一掃することを手はじめに、総じて資格任用制（Merit-System）の確立が必要とされよう。

ところで、近代政治の担い手である政党について、一党独裁、支配的非独裁、二党対立、それに小党分立と四つの政党制に分類したが、それぞれの範疇に属する国家的な政治的舞台装置の背後に横たわる歴史的事情、政治的構成および制度的配置の検討によつて、ラテン・アメリカにおける若干の重要な諸事実が明らかになつたことと思う。

一党独裁制は確かにあまりにもラテン・アメリカ的であると云わなくてはならない。しかしながら、今日ではもはやそれは前近代的ラテン・アメリカの置土産にすぎないのであつて、これが遅かれ早かれ姿を消すであろうことは間違いない。ヴェネズエラはすでに敢然と民主的体制に指向しており、この範疇において論ずること自体、正しくなかつたかもしれない。

パラグアイもまた一党独裁とするには疑問があり、ドミニカも伝統的独裁体制のあと始末に苦慮しているように見受けられる。だが、少くともごく最近まで一党独裁を伝統としてきたこれら三国に共通して云えることは、ここでは慣習的に用いてきた「一党独裁」ないし「一党制」なる言葉は、実質的に集中権力による全体主義的支配、あるいは独裁とか専主政治を意味するものではあつても、じつさいには決して一党国家の概念を伝えるものではないということである。要は、「一党制」とは言葉の矛盾ではないだろうか、ということだが、ラテン・アメリカ諸国のいずれもが経験している独裁体制は多数政党制との比較においてなお一層このことを明確に示していると思われる。

この点、ここでは支配的非独裁制に分類したメキシコの場合、むしろ一党国家の概念に近いものとすることができよう。メキシコはラテン・アメリカにおいてはじめて社会革命をおこない、その後、国内の革命勢力を一本石化して支配的政党を設立したというモデル・ケースであるが、この立憲革命党はドミニカ党、コロラド党に比して遙かに政党の名にふさわしい。メキシコは、貴族主義的政党から名望家の政党を経て人民投票型民主主義にいたるマックス・ウェーバーによる政党発展の三段階をあてはめることも可能である。また、「個人代表の政党（Party of individual representation）」から「社会統合の政党（Party of social integ ation）」への変化についても明確な提示を求めることができよう。メキシコについては、要するに、「独裁」の概念とは基本的に対立する「民主主義」側に立つ一党制、すなわち「民主的統合の政党（Party of democratic integration）」として再検討される必要がある。

コロンビアとウルグアイにみられる二党対立制は、英米両国の二大政党対立制ほど深い輪郭を整えていない。二個の主要政党の枠内においてさえ、絶えず隠れた多党制が党内分裂、派閥抗争、あるいは第三政党のような形において、政治戦線の決定的均衡に影響を与えるのだが、ラテン・アメリカではこれが新しい組み合わせや妥協を強要する凝集作用として働くことはほとんど稀である。

政治勢力の凝集性は、ラテン・アメリカにはまったく乏しい。このことは小党分立制諸国において充分観察されるところである。いちおう二傾向対立を装うものの、対立する戦線間の統制に欠け、つねに離合の危険に曝されている。また、威信に乏しく、特殊利益の妥協、吻合に堕しやすい。したがって、一挙に独裁に転化する危険もある。だが、ほとんどのラテン・アメリカ諸国にじつさい受け容れられているように、小党分立が柔軟性に富み、行動の自由性が残されていることなどに国民性と密着したものがあるのだとすれば、ここに、民主的にして効果的なリーダーシップの必要なることが要請されねばならない。

序論にも述べておいたように、ラテン・アメリカには「責任を果しうる」、信頼するに足る政党の存立が強く要望されている。どのような政党がこうした要望に応えうるか、それは個々の政党における機構や諸機能についてのさらに詳細な検討を俟たなくてはならない。だが、政党の諸類型とそれぞれの特徴を概観したところで云えることは、ラテン・アメリカに固有のものとして最近めざましい抬頭を示している民族的社会主義政党に大きな期待を寄せることができよう。ペルーにみられるアプリスタ運動は、「民主的統合」の責任を果すにもつともふさわしいものと思われる。中産階級ならびに労農下層階級に基盤をおくこの運動がどのような展開を試みるか、これと伝統的支配勢力との争いは楽観を許すものではないが、今後のラテン・アメリカにおける政党運動のこの一大焦点は、われわれの注意力を集中するにふさわしい内容を含むものであることを最後に附言して本稿を締め括ることにしたい。